Literacy

68

春

厳しい寒さが続く冬は、春の訪れが心の底から待ち遠しく、一年でもっとも暦が気にかかる時期です。

太陽がもっとも陰に潜む「冬至」。正月、そして「寒の入り（小寒）」。寒のうちが進み、もっとも寒いと言われる「大寒」から節分を挟んで「立春」。降る雪が雨にかわり、雪が溶け始める「雨水」が過ぎ、ひな飾りの桃の節句が過ぎれば、生き物たちが動き出す「啓蟄」の頃。今年3月21日「春分」で、昼夜の長さが逆転して、暑さ寒さも彼岸まで。本格的な春ですね。

二十四節気が刻む季節の移ろいに敏感なこの時期。春の息吹が嬉しく、一日一日の暖かい陽射しに感謝して、今日を過ごす喜びを謳歌したいものです。

深田　賢之

お知らせ

まちづくりの視点はそれぞれの生活スタイルを選択するプロセスに着目することから始まる。そのメッセージを「生活芸述」という切り口で発信してきましたが、次号からリニューアル予定です！　お楽しみに。

まちのミカタ
Literacy
2014.3 vol.68

発行・編集
特定非営利活動法人　岡崎まち育てセンター・りた
〒444-0072 岡崎市六供町字杉本78-1
TEL (0564)23-2888／FAX (0564)23-2898
http://www.okazaki-lita.com
http://www.facebook.com/okazaki.lita

配布
岡崎市図書館交流プラザ・Libra／岡崎市内の地域交流センター
会員宛へ郵送　等　※会員登録をご希望の方は左記までご連絡ください。

配布協力
Ragslow／亜cha:la／森の花畑／FMおかざき／松應寺／杉くんの駄菓子屋／FURA gallery／angelshare／長誉館／cafeくらがり／コミュニティ・ユース・バンクmomo／三河サドベリースクール シードーム

最後に選択した商品や行為はどのようなものであっても、
その結果に至るまでのプロセスの中で生まれた
個人の価値観への気づきや意味を、
一つの物語としてステイトメント（表現）する。
まちづくりは「生活芸述」の視点から始まる。

生活芸述

名もなきはかないあたりまえの　輪郭を描くこと　ーYutaka Amano
見えていないものをミルこと　ーTakahiro Yamada
際限のない面影さがし　ーTakahiro Okada
提案以上押し付け未満　ーSayoko Fukaya
日常の中で自覚する、よりよく生き・暮らすための気づき。　ーKenshi Fukada
固定概念も否定しないこと　ーRyoto Hiraiwa

今、僕らに何が見えていないか？

まちづくりは、誰が誰のために、何の基準を持って進めているのだろうか？税金を投じて整備される文化施設やコミュニティセンター、道路や橋などの公共インフラ、それらのデザインや活用方法などのソフト事業。原発政策もそう。こうした政策の過程において生じる良し悪しの価値観の違いは、行政と住民の間にだけでなく、住民一人一人異なるものであるがゆえに、その是非に対して、個人的な感覚や立場によって評価される状況になってしまっている例も少なくない。

今、僕らに見えていないのは、「評価基準」だと思う。政策（特に大きな事業）に対して、○○委員会や△△審議会など、専門家や識者が名を連ねる諮問機関が設置されているが、そうした個々の発言力や提案力がある人たちの集まりだからこそ、絶対にブレてはいけない「評価基準」（例えば、○○の十か条）が最も必要である。どんな目的（社会課題／地域課題）に対しての事業案や発言なのかを明確にしたうえではじめて議論が活かされる。好き嫌いという個人の価値観や意志は大切だけど、それは個人事業として成すべきもので公共的事業に持ち込むことは不毛である。

先進的であることや斬新的であることと、歴史に特化しているなど、人ぞれぞれの‘言い分’があるのも同様に大切であるけど、それが個人的な価値観だけの指針になっていないだろうか？だからこそ「評価基準」をつくることからスタートしてはどうだろうか？

それでも、僕らのあずかり知らない、力及ばない政策が山ほどあり、進められていく。これらがどのように歴史として残されていくか。抵抗したり反映されなかった意見や意志は自然と消えていってしまう。過去の歴史は、勝った歴史が歴史とされてきた。その裏側にある個々の心情や記憶の中にしまわれているものは、記録としては残されない。

僕らがすべき任務は、なぜそうなったのかというプロセスを事実に基づき継承すること。勝った側、残されている側の立場ではなく、負けた側、残らなかった側の立場からの事実も遺すこと。未来の受け手には、その事実を見るだけではなく心でも感じてもらいたい。

次なるオルタナティブ（代替案）の可能性を遺すために、見えない歴史をこっそり遺すこと。

事実がなくなってしまうことが最悪のシナリオである。

見えない価値

自分が暮らす場所について、考えていた。そもそも、どんなところに住みたいんだろう？

ー駅に近い場所？
ー閑静な住宅街？
ー南向きの庭付きの家？

こうした情報は手に入るが、それだけでは決めることができなかったのが事実。今まで、そうしたことを考えたことがなかったので、いくつかのまちを実際に歩いてみた。

そこで、見つけたもの。

ー子どもたちが庭で、まちで最高の笑顔で遊んでいる風景
ー買い物の途中、おばあちゃんたちが家の外で身の上話をしている風景
ー自分の家や庭から見える風景が気に入る場所
ー自分の家にたどり着くまでの冒険心をくすぐる風景（アプローチが複雑）

自分がほしかったもの、その基準は誰かのものではなく、自分のもの。

不動産の価値基準というものは、本来こういうものなんじゃないだろうか。

まちづくりの輸出入

僕らが関わる「まちづくり」は、地域密着型。

Litaがコンサルや専門家と異なる点は、仕事としても暮らしとしてもこのまちにずっといるということ。地域交流センターの指定管理事業の意義も、ここにあると思っている。こうした密着型まちづくりの先進的取組が他地域へ輸出され、波及し、また岡崎にも輸入されてくる。

「隣の芝は青くみえる。」

そう感じたことがあるのは、僕だけじゃないと思う。ただ、メディアや媒体を通じて得る情報は、‘ありのまま’の姿ではなく、メディアや評論家などのフィルターや視点を通して輸出入されていることがある。それを象徴する最近の傾向として、建築家やコミュニティデザイナーなどがアーティストとして位置づけられてメディアなどに露出することの多さがある。

まちの活性化よりも、仕掛け人の存在が目立っているケースも少なくはない。メディアは、まちのことよりもそのアーティストへの関心が強い。もちろんそうした情報をほしがっている人たちがいるというのが事実なので仕方ないことだけど・・・

いろんなまちづくりの事例が飛び交っている。でも、本当に必要なものは、自らの手で輸出入したい。

このまちで

Litaが進める小さな単位でのまちづくり。チイキで暮らすヒトにスポットが当たるまちづくり。

今はまだ、草の根レベルの地道な活動かもしれないけど、こうした活動を将来にどうつなげていけるのかが今後のポイント。まだまだ試行錯誤していくことはたくさんある。

Litaは、現在50名近くのスタッフを有するＮＰＯ法人。事業規模も億を超える。岡崎市は、３８万人の中核都市。2016年に市政100周年を迎える。

そして、200周年のとき、岡崎のまちは、どんなまちになっているのか。ここに住む人はどんな思いをもって暮らしているのか。Litaはあるのか・・・

有名なものなんていらない。貴重なものもなくていい。まちは、誰かに誇るためにあるんじゃない。まちは、自分たちで味わうためにある。

Text：Takahiro Yamada